

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
夏号は、長良川・揖斐川・大榑川に囲まれた
海津市平田町から、
その歴史と大榑川の治水事業を中心に、
歴史ドキュメントでは「川の祭り」を特集します。



海津市平田町

ふるさとの街・探訪記

木曽三川とともに歴史を刻んだ 海津市平田町

エリア・リポート

保存・継承される輪中堤・大榑川左岸堤防

気ままにJOURNEY

美しい水郷の町にゆらめく歴史、
その足跡を訪ねて。

歴史ドキュメント

川や水神へ。
敬虔な信仰心を語り継ぐ川祭り

TALK&TALK

長良川河道の変遷と河川利用

民話の小箱

観音寺の和尚の祈祷





木曽三川とともに歴史を刻んだ 海津市平田町

海津市平田町のあらまし

平成一七年の市町村合併により、海津町・南濃町と合併した平田町は、長良川と揖斐川に囲まれた地域で肥沃な土壌に恵まれていま。海拔は〇・三mと低く古くから洪水に備えて堤防を築いたことから、この地方独特の「輪中」を形成、わが国を代表する「高須輪中」の北部に位置しています。

からなる地域です。

平田町の名前の由来は、宝暦治水の総奉行平田



築造されましたが、そうした先人たちの偉業に敬意を表するために、この名がつけられました。

太古から中世までの歩み

太古の昔、このあたり一帯は低湿な沼地。木曽・長良・揖斐川の三大川による運搬土砂が徐々に堆積し、陸地化してきました。この地域にいつ頃から人が住んでいたのか確かめることはわかっていませんが、比較的新しい時代のもので、これまでに縄文から弥生時代の遺跡は発見され

ていません。

平田町一帯の古代における所属郡は尾張国海部郡と美濃国安八郡でした。

昭和三五年（一九六〇）、海津町平原で平安初期の住居跡が発見されており、それより北に位置する平田町においても集落が存在していたと推測されています。

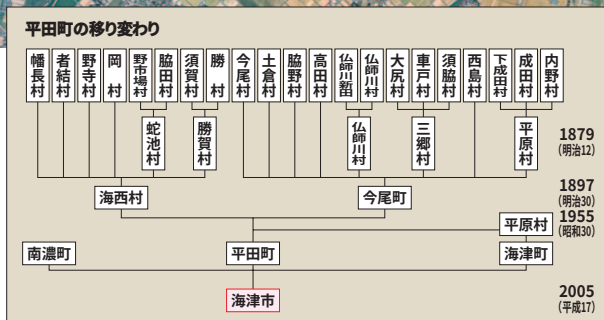
平安時代末期から中世にかけて各地で新田開発が行われ、平田町周辺には安八郡上・下大樽両村を本所とする皇室御領の大樽荘、九条家領で石津郡上野河戸村を本所としていた郡戸荘、近衛家領で中島・海西郡に亘る荘域をもっていた長岡荘などがあり、その一部が平田町域にも存在したと伝えられています。

今尾城と戦国時代

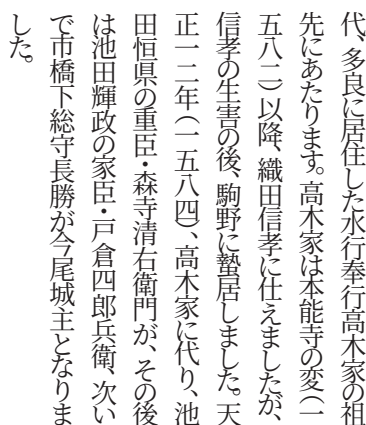
文明年間（一四六九）八七には美濃国守護大名の家臣、中島三郎太夫重長が、今尾城を築城し以後七〇年間、四代にわたって居城しました。四代目の重行が織田信長に追われると、高木彦左衛門が入城しています。彦左衛門の入城はおよそ永禄一〇年（一五六七）。江戸時



平田町空撮



天正二年、小牧・長久手の戦いに、今尾城主森寺氏は豊臣方として参戦。松ノ木（海津市海津町）に本城を持ち、脇田（平田町蛇池）に出城を持ち、吉村又吉郎



は徳川・織田連合軍に属しました。今尾と脇田は今でこそ同じ平田町ですが、当時はそれぞれ別の国。森寺氏を攻撃した吉村氏は今尾の町を焼き払い、さらに高須城（海津町）を攻め功績を挙げました。このときの吉村氏の働きに対し、織田信雄は「今に始まらぬ粉骨の儀」としてその功を称えています。この戦いは、長久手の戦いにおける西南濃の重要さと吉村氏の当地方における地位をうかがわせませう。吉村氏は戦功により加増され、平田町域の幡長（はたなかし）者紹岡村、須脇のほか、大藪横江などを領知しましたが、信雄の領地削減処分に伴って、領地没収となりました。その後、戸倉氏の時代を経て、今尾城主として、市橋長勝が入城しました。長勝は太閤秀吉に仕え、朝鮮征伐には二百人の士卒を率いて参加。秀吉亡き後は徳川家康に属し、関ヶ原の合戦（一六〇〇）を迎えます。

合戦に先立ち、大樽川の勝村渡しで激



戦が繰り広げられました。

勝村の攻防戦は、今尾城主・市橋らの東軍と、福束城主・丸毛兼利らの西軍の戦いです。そもそも福束城は、大垣・桑名間の交通路上にある要衝です。慶長五年（二六〇）八月二六日、両軍は大樽川を隔てて終日戦い、その夜長勝の軍が渡河して進撃し、翌日西軍を破り、福束城を落として、大垣―桑名の通路を絶ちました。

竹屋家略系譜

A vertical genealogical chart of the Bashya family. The chart is organized into five vertical columns representing generations. The rightmost column (Generation 5) includes the family name '家康' (Yasukuni) and '龜相心院' (Kameakoinin), with a note '尾張藩' (Owari Domain) to the right. Below them are '正信' (Masashige), '正晴' (Masaharu), '友正' (Tomomasa), and '正映' (Masaharu), with a note '帯刀正殿の子' (Child of the Sword-bearing Hall) to the right. The next column (Generation 4) includes '竹屋光昌' (Takeya Mitsumasa) and '勝起' (Katsuki), with a note '尾張藩藩主の子' (Child of the Owari Domain Lord) to the right. Below them are '睦群' (Mochikuni) and '正定' (Masadamu). The third column (Generation 3) includes '正武' (Masatake) and '勝起' (Katsuki), with a note '石河原藩の子' (Child of the Ishihara Domain) to the right. Below them is '睦群' (Mochikuni). The fourth column (Generation 2) includes '正業' (Masayoshi) and '正吉' (Masayoshi), with a note '二〇代' (20th generation) to the right. Below them is '正巳' (Masami). The leftmost column (Generation 1) includes '正文' (Masahito) and '正末' (Masamutsu), with a note '二一代' (1st generation) to the right. A note '東久世道雄の子' (Child of Higashiyasu Michio) is placed to the left of the first column.

```

graph TD
    subgraph Gen5 [五代]
        Yasukuni[家康]
        Kameakoinin[龜相心院]
        Masashige[正信]
        Masaharu1[正晴]
        Tomomasa[友正]
        Masaharu2[正映]
        Note5[尾張藩]
        Note5a[帯刀正殿の子]
    end

    subgraph Gen4 [四代]
        Mitsumasa[竹屋光昌]
        Katsuki1[勝起]
        Mochikuni1[睦群]
        Masadamu[正定]
        Note4[尾張藩藩主の子]
    end

    subgraph Gen3 [三代]
        Masatake[正武]
        Katsuki2[勝起]
        Mochikuni2[睦群]
    end

    subgraph Gen2 [二代]
        Masayoshi1[正業]
        Masayoshi2[正吉]
        Masami[正巳]
    end

    subgraph Gen1 [一代]
        Masahito[正文]
        Masamutsu[正末]
    end

    Note1[東久世道雄の子]

    Mitsumasa --- Masashige
    Mitsumasa --- Katsuki1
    Mitsumasa --- Mochikuni1
    Mitsumasa --- Masadamu

    Masatake --- Katsuki2
    Masatake --- Mochikuni2

    Masayoshi1 --- Masami
    Masayoshi2 --- Masami

    Masahito --- Masamutsu
  
```

江戸時代を迎えると、平田町一帯の支配機構は複雑に交錯します。野寺、岡村をはじめとする六ヶ村は高須藩徳永氏の所領、勝村、仏師川村等一〇ヶ村は幕府領、今尾村、土倉村等六ヶ村は尾張藩領など、こうした支配機構は時代が進むにつれ変化します。

元禄の石高帳によれば、尾張藩付家老の竹腰氏が三万石を有し、今尾に館を置いています。竹腰氏の支配は初代正信から二〇代続き、慶応四年（一八六八）今尾藩として独立しています。このほか、前期

には尾張藩領内には石河氏などの給地がありました。

平田町と海津町北部地域には近世初頭に古高須輪中が形成されていました。その後、古秋江輪中、本阿弥輪中などと一緒に、現高須輪中が成立しました。

平田町は高須輪中の中では比較的高地にありますが、大樽川の氾濫の脅威に直接さらされる地域でもありました。

江戸時代の主な普請をみますと、寛永一二年（一六三五）には野寺の堤が決壊し、長さ約二万間の堤防が、人足約一四万人の百姓役で美濃の国役普請として修復されました。その六年後には、幡長村の堤防を修復普請し、新しい枡が四ヶ所伏せ込まれました。宝永元年（一七〇四）には、川の流れの障害となっていた民家や竹藪などを撤去する大取払い普請が行われ、平田町域でも堤外の竹木・猿尾などが残らず取り払われました。

宝曆の御手伝普請では、町の北境を流れる大樽川の長良川口に洗堰が築造され、仏師・川村・須賀村・者結村・岡村・勝村をはじめとした村々の堤防の腹付や土置の補強工事が行われました。その後、天明・寛政・文化・文政・天保・嘉永・万延と御手伝普請（金普請）による工事が洪水のたびに行われ、平田町域の普請も続けられました。こうした工事と並行して、天保十一年（一八四〇）、高須輪中は輪中

堤丈夫附(補強)普請の請願を許可され
自普請で工事を行いました。

今尾の市と米会所

天正八年(一五八〇)、織田信忠は今尾市を許可しています。これは以前の市を復活したもので、永禄末年今尾城主となつた高木権左衛門が城下町の繁栄策として主君の信忠に願ひ許可されました。この免許状は今も多良高木家の子孫に伝えられています。

この市はやがて途絶えますが、竹腰家三代友正は、元禄二年(一七〇〇)今尾表町市の開設を許可し、一六日を市日とする六斎市が再開されました。今尾表町市は開設後漸次繁栄しますが、元禄一六年今尾の町は大火にあい、町中が類焼し、市も中止となりました。

その後正徳二年(一七二二)、竹腰正武の代に店を出すように命じられますが、類焼した商人たちには資本力がありません。そこで拝借金を願ひ出て店を作り、上市・下市隔日に六斎市を立て、七月一日から二三日、一二月、二六日から晦日まで市を立てることを認められ、市は再開されました。その店の数は百戸あまり。隣接村からも多く訪れ、にぎわいを見せました。今尾市には、太閤秀吉の少年時代、者結村の神保家に居候していた折、買物に訪れたという伝説が残っており、その伝説からも古くからの繁栄ぶりをうかがい知ることができます。

享保八年(一七二三)には、米会所を

新設。名古屋の商人・肴尾仁左衛門ら一七人に御蔵米払方商株を許し、今尾の人川(木曾屋、小右衛門)とで、米相場をはらせました。その後、米会所はいったん中止されましたが、宝暦二年(一七五二)に再開され、明治まで続きました。

明治以降の平田町

明治時代になると藩籍は奉還され、平田町は明治四年(一八七二)に今尾県、笠松県、名古屋県に所属。その後変遷を繰り返しながら、昭和三〇年(一九五五)旧平田町が誕生しました。

明治二〇年(一八八七)には三川分流を目的とした木曽三川下流改修(明治改修)が施行され、平田町域では大敷・勝賀間に総延長一九〇間の大樽川締切堤が完成、ヨハネス・デ・レーケが計画した近代的な治水工事により、水害は減少しています。

そうした中でも明治二九年は風水害に相ついで見舞われる災難の年となりました。七月二二日、激しい暴風雨にあつて河川の増水が著しく、勝賀村字梶池の長良川堤防が決壊、ついで損斐川筋でも今尾町鯉池で決壊し高須輪中全体が大きくな浸水被害を受けました。九月には損斐川の水位が急上昇し(濃尾大地震の山崩れで出来た湖の水が一気に流出したためといわれています)、九日今尾で決壊、さらに二一日には台風が来襲したため七月以上の浸水となりました。この年の水害は平田町では最大級のもので、平田公園



明治29年洪水点の標識(平田公園内)

にこの時の洪水標識が残されています。

戦後では昭和二七年(一九五二)六月二四日、ダイナ台風が上陸し、所により瞬間最大風速二〇・三〇mに達しましたが、平田町域は暴風の直接被害はほとんどありませんでした。しかしこの前線から伸びる梅雨前線は太平洋上に横たわり続け、その影響で長良川上流に二七七mmの豪雨が発生、海西村勝賀(現平田町勝賀)の長良川堤防が決壊しました。

このとき輪中地帯の宿命ともいふべき水争いが発生、輪中内にある小堤防を切つて濁流を放出しようとする上方集落と土俵積みをして集落を濁流から防ぐとする下方集落との対立が各所で起き、うとするが、幸い大事には至りませんでした。ほとんどの苗は腐りましたが、岐阜県農業改良課は二八〇万束の苗を各町村に配布し、翌年には秋の実りを見ることができました。

新たな市制がスタート

かつての平田町では、湿地での裏作のため高うね作りが行われていましたが、昭和二〇年代から開始された土地改良事

業により裏作の容易な乾田に変わっていき、ついで、その後、

農業経営の近代化が進み裏作は余り行われなくなり替ってビートルハウスによるトマト・イチゴ・キュウリなどの促成栽培が行われるようになりました。

その一方、昭和三四年には県道岐阜・南濃線が拡張整備され、四八年には北部バイパスが完成、五四年には南濃大橋、六〇年には今尾橋が相次いで架け替えられ、交通網も充実しました。これらの整備により、平田町域にあった二〇ヶ所の渡し舟は姿を消しました。

度重なる洪水に悩まされ治水事業を繰返してきた平田町は、豊かな穀倉地帯に成長、平成一七年には海津市平田町とした新たな市制がスタート。「光と風と水のふれあい庭園都市」を目指して、さまざまなプロジェクトが計画されています。



豊かな水田風景



市制スタート

AREA REPORT

海津市平田町

保存・継承される 輪中堤・大樽川左岸堤防

大樽川は長良川と揖斐川をつなぐ人工河川。左岸堤防は、高須輪中を洪水の流入から守る役割を果たしていました。しかし頻発する洪水により破堤し、幾度も復旧工事を実施明治時代の河川改修により、大樽川は締切られました。以後左岸堤防は輪中堤に。現在、大樽川修景事業が行われ、平田公園とともに新しいランドマークになっています。

大樽川の開削

平田町内を北に向かうと美しく整備された堤防に行きあたります。かつて長良川から分流し高須輪中の北縁を揖斐川へ西流していた大樽川の左岸堤防です。大樽川は度重なる水害から高須輪中を守るために開削された人工河川でした。

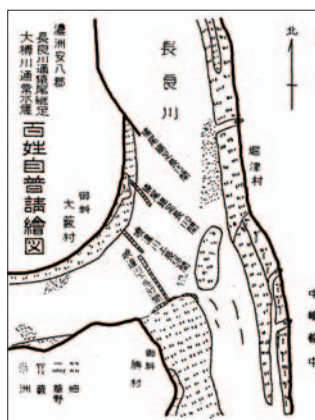
開削の直接的な原因となった洪水は元和二年（一六一六）六月に発生しました。この洪水により脇田村、現平田町蛇池で堤防が決壊し、高須輪中は大洪水となりました。その決壊口が修理されてまもない八月に再度決壊したばかりではなく、二度目の修理が完成した翌年の五月に再び堤防は決壊しました。このため高須輪中の人々は、長良川の水勢を緩和するため、長良川筋の勝賀付近より、揖斐川筋の今尾に通ずる新川を掘り当てることを願い出て、自費請で工事を開始。元和五年（一六一九）一二月に大樽川は完成しました。大樽川の開削に伴って築堤された大樽



川左岸堤防は、以後高須輪中の北辺として水防に大きな役割を果たしていました。

大樽川洗堰築造とその争論

大樽川の開削により、長良川筋の洪水被害は軽減しましたが、大樽川を通じて長良川の水の一部が流入するようになった大樽川沿岸や揖斐川筋では以前にも増して洪水被害は大きくなりました。このため、寛延三年（一七五〇）か



ら四年にかけての百姓自普請によって、流頭部に喰違常水堰を設け、長良川の洪水の大樽川への流入量を制限しました。しかしそれでも十分にその効果を見るまでに至らなかったため、喰違堰の下流側に、宝暦治水の一環として、長さ九八間、高さ四尺の洗堰を築くことを決め、宝暦五年（一七五五）三月二八日に完成しました。最もその洗堰も、宝暦五年五月下旬の出水で右岸側の高水敷が流失したため、上流側に新しく造り替え、さらに明和三年（一七六六）に場所を変えて築造されました。

このような洗堰の築造によって、揖斐川へ向かう長良川の洪水や土砂の量は大きく減り、揖斐川筋には大きな効果

左岸堤防と大樽川

をもたらしました。しかしその半面、長良川側では洗堰より上流部での水位は以前よりも高くなり、墨俣・



洗堰の模型(洗堰公園内)

森部・大明神・中須・桑原・大浦・足近の各輪中は、宝暦治水工事以前より被害を多く受けるようになりました。

このため、洗堰の存亡をめぐる争論がしばしば発生。安永二年(一七七三)には大樽川洗堰の取払いを堤防御役所に再三請願するなど、洗堰をめぐる争論は、明治時代になるまで続きました。勝賀大池にある洗堰公園には、洗堰を再現した模型が展示されており、その構造や役割の理解に役立っています。

頻発する洪水と大樽川堤防の復旧

大樽川洗堰は、その利害を異にする輪中間の争論にまで発展しましたが、その一方、高須輪中の防御線となっていた大樽川の堤防も度重なる洪水により、修復工事が数多く実施されていました。

宝暦七年、岡村(現平田町岡)の大樽川堤防が決壊し大きな被害をもたらしました。この洪水では、大量の砂入りが発生し砂の除去に十年を超える歳月を

要し、尚完全には除けきれなかったとの記述が見られます。

その後も洪水は頻発し、天明二年(一七八二)の御手伝普請では、大樽川堤防一六ヶ所の修復工事を実施しています。寛政一〇年(一七九八)にも前代未聞の洪水が発生し、大樽川堤防一〇ヶ所で堤腹付や堤上置などの工事が行われています。さらに文化元年(一八〇四)の御手伝普請、文化十二年の仏師川切に際しての復旧工事などが行われています。

大樽川締切により左岸堤防は輪中堤に

明治三年(一八九九)、木曾三川下流改修、明治改修の木曾三川分流工事により、大樽川の締切工事は始まりました。完成は翌年二月、長良川口は締切られ、大樽川は福束輪中の排水河川となりました。



大樽川洗堰(明治年間使用)

ました。明治三十六年、大樽川が揖斐川に流入していた流末に「禹閘門」と呼ばれる排水樋門を築造しています。禹閘門は揖斐川の出水が大樽川に逆流するのを防止するための水門です。



昭和27年に改築した禹閘門

大樽川左岸堤防は、北の福束輪中と南の高須輪中を隔てる輪中堤となり、明治以後、何度か廃堤問題が起きましたが、現在まで残されてきました。

一方、右岸堤防は取り壊され、堤防の土は掘り潰れた遊水地の埋め立てに使用されました。住民の手で竹を植え、草を刈って守り続けてきた堤防は新しい耕地に利用されることで第二の役目を果たしたのです。

大樽川左岸堤防と水防活動

大樽川廃川後、左岸堤防は輪中堤として、北の福束輪中で破堤入水があったとき、洪水が南の高須輪中へ流れ込むのを食い止める働きをしていました。

この輪中堤の水防に当たっていたのが、江戸時代からの水防制度の慣習を受け継ぐ水防組合で、明治一六年(一八八三)、高須輪中の各町村が結成した「高須輪中水利連合会」がそれです。その後の町村制の施行により、明治三〇年には、高須輪中水害予防組合を結成

しています。規約によれば、組合設置の目的として、木曾三川筋の水防とともに大樽川通堤防の修築保全を掲げています。

これは近世からの慣習を踏襲するもので、平素から水防活動に必要な水防倉庫を設置して必要な資材を備えるとともに、各堤防の巡視や維持管理にあたりました。

輪中堤上にある「ごぐら」とは、「諸色庫」とも呼ばれる水防倉庫です。杭、松明、俵、縄、伏越、樋、竹、木材などを貯蔵して洪水に備えていたようです。この「ごぐら」の名残を留めているのが、現在、木曾三川や支派川堤防脇に建つ「水防倉庫」です。貯蔵物の内容は異なっているとはいえ、水防に必要な備品が収納されています。

「高須輪中水害予防組合」は、昭和三二年(一九五七)に「高須輪中水防事務組合」と改組して、輪中の水防活動にあたりました。



現在の水防倉庫(岡水防倉庫)

見直される輪中堤の重要性

明治以降の治水技術の発達により、小輪中堤は道路交通の障害になるとしてその多くは取り壊されましたが、大樽



平田リバーサイドプラザがオープン

平田町野寺の長良川河川敷に「平田リバーサイドプラザ」が二〇〇五年三月六日オープンしました。リバーサイドプラザの構想が持ち上がったのは、平成五年度、長良川右岸河川敷の開発整備構想を立てました。以後着々と計

画を立案しながら、平成一〇年、平田町と輪之内町は、各々の河川敷の開発計画を国土交通省の「水辺の楽校プロジェクト」に共同登録し、広大な整備事業がスタートしました。

「公園外周通路」や「砂浜」、「じ

やぶじゃぶ池」などが整備された公園は、まさに川辺のリゾートエリア。海津郡三町が合併した今、新しいレクリエーションスポットになることでしょう。



川左岸堤防は、道路の部分で切割という構造にし堤防を残しました。洪水になった場合は真ん中に柱を立て板をはめ



切割



て土嚢を積むことにより堤防を締切ることになっています。

大樽川左岸堤防をはじめとする輪中堤の重要性が見直されたのは、昭和五一年（一九七〇）の九・二豪雨災害でした。安八町のほぼ全域が浸水する中、隣の輪之内町は輪中堤で浸水を防ぎました。この時、平田町でも大樽川左岸堤防の切割を全て締切って輪之内町からの洪水の侵入に備えました。

大樽川の修景事業

先人たちが智慧

を絞り工夫を重ねて築き上げてきた輪中堤。この堤防を保存・継承するために、平田町では昭和六二年（一九八七）より大樽



平田公園の風景



平田公園の平田頼負翁の銅像

川左岸堤防の修景事業を開始し、堤防法面の修理や不要樹木の伐採、天端の町道改良、桜の植樹など、景観形成を行ってきました。昭和六二年から平成一三年度までに植樹された桜は約千本。今では美しい桜並木に成長しています。その一方、平成七年には大樽川堤防の傍に平田公園が誕生しました。これは大樽川堤防との一体化を目的に整備された公園で、平田町の町制四〇周年に合わせて、宝暦治水の総奉行・平田頼負翁の銅像も完成しました。広大な敷地には、全天候型の多目的ドームをはじめ、パターゴルフ場、芝生広場などが

整備されています。古来より水の恩恵を受けながらも、水と闘ってきた輪中地帯。平田公園はそんな平田町の新しいランドマークです。地域の人々が心豊かに交流する新しいリバーフロントだといえましょう。



大樽川の桜並木

■参考文献

『木曾三川の治水を語る』
昭和四四年 木曾川上流工事事務所
『木曾三川とその流域と河川技術』
昭和六三年 建設省中部地方建設局
『平田町史』下巻 昭和三九年 平田町
『伸びゆく輪中』 昭和六二年 海津町
『大樽川』 平成三年 輪之内町
『1976年 9.12豪雨 災害特集』
昭和五二年 羽島ライオンズクラブ

美しい水郷の町にゆらめく歴史 その足跡を訪ねて

夏の陽射しを浴びてきらめく、揖斐川や長良川の川面。坦々とどこまでも続く青田では、稲が風に揺られています。今ではすっかり穏やかな平田町は水とともに生き、水とともに日々を重ねた水郷地帯。そんな歴史を訪ねて旅をしてみることにしましょう。

美しい水郷地帯へ

名神高速道路の大垣インターチェンジを南へ。今尾橋で揖斐川を渡ると、夏の光に包まれた平田町が、静かに出迎えてくれました。

光と風と緑に包まれた田園地帯、それが平田町です。長良川の川面には夏の太陽がさざめき、青い稲の波は、実りのときを待ちわびているようです。

美しい水郷地帯は、歴史と自然が紡ぎ上げた町。川の恵みは豊かさをもたらす一方、時には牙をむき、襲いかかることもありました。平田町に残された史跡の数々は、物言わぬ歴史の語り部です。そんな史跡を訪ねて散歩してみよう。とにいたしましょう。

今尾渡しのだ標

揖斐川にかかる今尾橋の程近いところに、今尾渡しの道標があります。

今尾は古くから市が立ち、米会所が開かれたところ。戦国時代の戦火に見舞われたのも今尾なら、商人たちの活気に

満ち溢れたのも今尾。

西南濃地方でも中心的な役割を担う町のひとつでした。

そんな繁栄ぶりを今に伝えるのが、今尾渡しの道標です。かつて、自動車も鉄道も



今尾渡しの道標

ない時代、川は大切な交通手段でした。揖斐川は、伊勢湾と日本海をつなぐ役割を果たし、海を持たない地方の人々に豊かな恵みをもたらしていました。

今尾は江戸時代以来、大垣・桑名を結ぶ舟運の重要な中継地。輪中内の道々はすべてこの今尾の渡し場につながっていました。こうした要衝の地に建てられていたのが、道標です。そこには行く先や目的地までの距離が記されており、地図を持たなかった昔の人々の案内役を果たしていたのです。

今尾の道標は嘉永四年（一八五二）に造立されたもの。揖斐川を上下した昔の船頭さんの話によれば、三重の台座と頭部に灯明をとすものは、今尾以外の揖斐川筋にはないほど立派なものだったそうです。

昭和の初めに今尾橋が架けられて今尾渡しは廃されましたが、道標は渡し場がなくなってから現在の場所に移され、頭部が今も残っています。

西願寺の山門と今尾城跡

今尾は文明年間（一四六九～一四七八）に今尾城が築かれたところ。江戸時代には尾張藩の付家老・竹腰氏が城主として入城しました。今尾東本町にある西願寺の山門は、今尾城の城門のひとつが移されたものです。左右に開く大きな扉とその門構えは、城門にふさわしい重厚なたたずまい。左右にある小部屋には、城に出入りする藩士などを、掟により調べる武士



西願寺の山門

竹腰正美と加藤春岱

今尾小学校入り口で美しい緑を香らせる松並木は、登城門に植えられていたもの。榎の古木や城址碑などからも、往時を偲ぶことができます。

竹腰家九代目の当主・正美は、茶の湯をたしなみ、蓬月と号した文化人でした。嘉永四年（一八五二）には、近世第一の陶工といわれた加藤春岱を招き、領内の鯉池に陶器窯を二つ築いたといわれています。この春岱の今尾窯は、岐阜県でも数少ないお庭焼



春岱今尾窯跡

平・田・町・の・歳・時・記

◆今尾の左義長◆

「どんと焼き」とも呼ばれる正月行事のひとつ。毎年2月11日に旧年の神札や新年用の門松やしめ縄を焼き、日(火)の神を迎え、大地を暖めて万物の生育を祈ります。当日は化粧をした若衆連によって竹神輿が秋葉神社にかつぎ込まれ、御神火を受けて燃え上がります。燃え残りの青竹は火難・雷除けのお守り。残り火で焼いた餅は病魔除けになると言い伝えられています。城下町今尾に今なお400年の伝統が受け継がれています。



◆船渡の燈明さん祭り◆

今尾の船渡にある常夜燈は、嘉永元年(1848)、今尾地区の人々の寄付によって建立され、夜に行きかう舟の道案内役を果たしていました。この常夜燈は燈明さんと呼び親しまれ、人々の信仰の対象でもありました。毎年9月23日には、提灯や幟を飾り、神事を含めた祭りを行っています。祭りの当日は、燈明さんの灯が今尾の渡し場を明るく照らしたように、提灯を持った人々が集まり、船渡の夜を照らします。夜空に大きくなびく8mの幟と燈明さんの灯りが、見る人の心に深く残る伝統のある祭です。



平田町 EVENT INFORMATION

天下の奇祭 「今尾の左義長」	2月11日
平田町農業祭	5月第1日曜日
平田町商工夏まつり	8月上旬
こん平田ワールド in 夏 ふるさと夏まつり	8月13日
平田町商工謝恩おたむふえあ	11月上旬



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC 東名・名神高速道路 (約40分) 大垣IC 258号線・県道213号線 (約15分) 海津市平田町

●お問い合わせ●

◆海津市市役所所在地◆

〒503-0695 岐阜県海津市海津町高須515番地 <http://www.city.kaizu.lg.jp>

◆平田庁舎商工観光課◆

〒503-0392 岐阜県海津市平田町今尾557番地 TEL0584-66-2411

今尾神社は慶長一九年(一六一四)、尾張藩主が五穀豊穡を祈り「神明神社

薩摩義士への感謝は今も

茶碗 鉢 壺 香炉、大きいものでは灯籠など、今尾窯で焼いた作品は、春込出を代表するものばかりです。織部釉の香炉や黄瀬戸の狛犬など、この頃の作品は、現在も町内に残されています。

き。今尾で過ごした三年余りは、春込の田熟期であり、当主の手厚い庇護の下、実に悠々と作陶に打ち込んだようです。織部、志野、黄瀬戸、御深井など、さまざまな伝統工法を踏襲しながらも、独自のロクロ技術と絵付けによって、春込風をかし出した名工は、この時期数多くの作品を生み出しました。



四方織部釉小箱 印花文大香炉(左)・黄瀬戸釉狛犬(右)

を創立したのが始まりです。尾張の徳川家がこの地に神社を建てたということもあり、尾張の徳川家の人々も安産や病氣平癒を願ってお参りに訪れたようです。神社の鳥居脇には、吉田松陰先生参拝碑があり、今尾の渡しに近くにあったこの神社には、舟運を利用して吉田松陰をはじめ多くの有名人が訪れたようです。昭和三年(一九二八)には天神神社といっしょに祀られることになり、今尾神社となりました。

今尾神社には、竹腰氏代々の霊を祀る「相霊社」、薩摩義士・平田靱負をはじめとする八〇名余りの霊を祀る「平田神社」などの社があります。

川の恵みを受けながらも、常に水害と闘ってきた平田の人々は、宝暦治水の



今尾神社

祈りの人波が続く千代保稲荷神社

義士への感謝の念を今も抱いています。大樽川に接して広がる平田公園では、その功労者である平田靱負翁の像が、おだやかな風景を見守っています。また、今尾の常楽寺には、黒田唯一衛門他五名の薩摩義士の墓があります。唯一衛門はこの地で切腹していますが、その理由には定かではありません。遅々として進まぬ工事の責任をとり、あるいは幕府に死をもって抗議したのではないのでしょうか。故郷の薩摩へ帰ることなく、常楽寺に葬られました。

宝暦治水をはじめ数多くの治水事業が行われた平田町は、今ではすっかり豊かな水郷地帯に成長しています。そんな稲田の中に、赤い大鳥居を際立たせているのが、「おちよぼさん」の愛称で親しまれている千代保稲荷神社です。商売繁

盛・家内安全のご利益がある神社とされ、正月や毎月末は県外からも多くの参拝客が訪れています。千代保稲荷神社が現在の地に祀られたのは、室町時代のこと。八幡太郎義家の六男義隆が分家の際、父から先祖の御霊を「千代に保て」と、宝剣や画像などを与えられ、これを祀ったのが始まりといわれています。平田町といえは「おちよぼさん」といわれるほどの町のシンボルは、京都の伏見、愛知の豊川と並ぶ、三大稲荷のひとつ。燈明場では、参拝客の願いが小さな炎となって揺らめいています。



千代保稲荷神社

川祭り

川や水神へ。
敬虔な信仰心を語り継ぐ川祭り

川は信仰の対象でした。河川と深く関わる農耕地帯では、川への畏敬の念とともに、水神信仰も生まれてきたようです。木曽三川下流域で今も行われる川祭りの数々は、五穀豊穡や水難防止、船舶の安全を願って行われてきたようです。そんな川祭りも時代とともに変化し、今は夏の風物詩として人々を楽しませているようです。

生活と密接な関係を保つ川

「文化の母なる川」という言葉が示すように、河川は古今東西を通じて人間の生活と密接な関係を保ち続けてきました。川は豊かな実りをもたらす一方、洪水などの禍を起こすこともしばしばでした。その禍を福に転じるために、治水技術も生まれ発展してきました。中国の伝承に登場する禹王の大業は治水。海津市海津町礼野などで神社の境内摂社として祀られているように、禹王は輪中地域の水神のひとつとして信仰されてきました。河川と深く関わる農耕地帯では、川を神格化することともに、水神信仰も生まれてきたようです。

また、日本人の信仰には、先祖の霊が霊山から下って訪れ、あるいは海の彼方から川伝いにやってきたという信仰もあります。正月の飾りものや七夕の笹、盆の精霊棚の飾りなどを川に流す習慣が根づいたのも、歳神や祖霊が川を通路として往来すると考えたからなのでしょう。

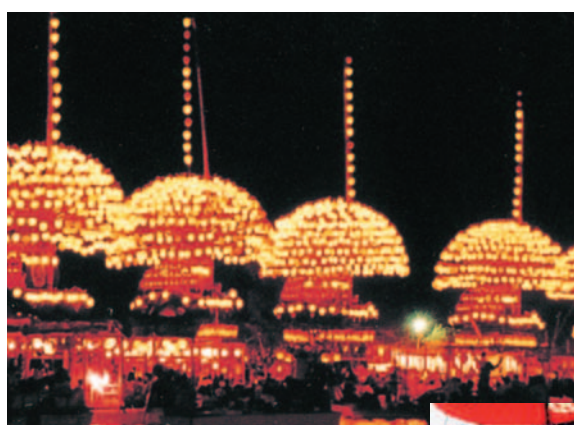
よう。その一方、不浄なものを川に流し去る習俗もあります。

また、川に関わりの深い祭りを見ると、夏場を中心とする夏祭りや、師走に行われる水神祭りがあります。本来は川や水神への信仰から生まれた祭りですが、現代のようにテレビもインターネットもない時代には、庶民のささやかな娯楽だったともいえます。地域に密着した川の祭りも時代の移ろいによって、消滅したもののありますが、地域の人々の手によって復活し、新しい祭りとして再生されたものもあります。

そこで木曽三川下流域に伝わる川祭りを紹介しましょう。

津島天王祭

日本三川祭りのひとつに数えられる「尾張津島天王祭」。津島神社の祭礼として五百年の伝統を誇り、全国の数ある夏まつりの中でも最も華麗なものと言われ、木曽三川下流域の川文化を代表する神事となっています。



津島天王祭



祭りはかつて、旧暦で行われていましたが、現在は七月の第四土曜日とその翌日に開催されています。

天王川に浮かぶ津島五車巻船の提灯に灯がともされると、宵祭りの始まりです。巻船が、津島笛を奏でながら悠々と天王川を漕ぎ渡ると、揺らめく提灯が川面に映り、巻船はその美しさをさらに際立たせ、灯と水の

ドラマは頂点に達します。

翌日の朝祭りは、昨夜とはがらりと変わり、市江車を先頭に六艘の車楽船が能の出し物をかたどった置物を飾り、楽を奏でながら漕ぎ進みます。先頭の市江車から一〇人の鉾持が布鉾を持って水中に飛び込み、川を泳ぎ、神社に向かって走るその姿は勇壮というほかありません。

その日の深夜零時には、前年の宵祭りの四日前に刈り取った神葎に穢れをつけて川に流す「神葎流し」が行われます。しかしこれは誰も見ることが許されない神事となっています。

津島天王祭は、津島神社の歴史とともに歩んできた由緒あるもので、その起源については諸説ありますが、始まりは室町時代末期頃と言われています。主な説は以下の三説です。

一、南北朝時代、後醍醐天皇の曾孫、良王親王が津島に逃れてきた。南朝方の

良王を守る津島の四家七苗字の武士が、北朝方の佐屋村の台尻大隈守という武士を討ち取った際、誘い出す口実とした「船遊び」に由来する。

※四家七苗字：津島の土豪名主たちで、「四家」は大橋・岡本・恒川・山川の四氏「七苗字」は堀田・平野・服部・鈴木・真野・光賀・河村の七氏を指し、両者あわせて四家七苗字と呼んだ。

二、須佐之男命が西の海より市江島（現佐屋町）に着船した折、草刈りの子供が遊び戯れているのを一瞥になって、児の舞、津島笛の譜を作られました。その後疫病が流行した時、これを用いて神さまを慰める祭りを行った。

三、京都の神泉苑へ御霊を鎮め送った祭事（神葭流し）が次第に地方へ伝播し、津島にも伝わった。神葭流しとは川辺に群生している葦に人間の罪、汚れを託し、あるいは葦の管の中へそれらを封じ込めて流すもの。夏の酷暑を無事過ぎすため、神葭を「よりしろ」神霊の宿るもの」とする「神迎え」の祭りである。

津島神社のある津島の町は、木曽川の支流である佐屋川に沿って開かれた湊町。織田信長は津島神社を氏神と仰ぎ、天王祭りを二度も見学しています。豊臣秀吉は、現在重要文化財に指定されている津島神社の楼門を寄進し、徳川家康は市江軍に小袖を、初代尾張藩主の徳川義直は、津島五ヶ村の巻簾船五軍に樂太鼓と小袖を与えるなど、各

時代の武将が津島神社を重視してきました。

この祭りは昭和五五年に「尾張津島天王祭の車楽船行事」が国の重要無形民俗文化財に、昭和五九年に「尾張津島天王祭の車楽」が県の有形民俗文化財にそれぞれ指定されています。

昔からの伝統・儀式・神事・祭事が時流に崩れることなく受け継がれる、数少ない神事のひとつといえます。

川島の川祭り

各務原市の川島地区（旧川島町）で行われる川祭りは、水神さまのお祭りです。三百年ほど前の江戸の享保年間に始まったといわれています。

木曽川の中洲に位置する川島地区は、洪水の常襲地帯。幾度となく洪水に悩まされてきた人々が、「五穀豊穡」「水難防止」を水神さまに祈願したのが、祭りのルーツとされています。

川祭りは川島地区のそれぞれの集落で行われていましたが、渡・北山集落の川祭りは、提灯で飾られた「舟やま」が木曽川に浮かび、昼から夜にかけて盛大に行われていました。祭りの記録は文化一〇年（一八一〇）から残されており、当初は一艘でしたが、明治二年（一八六九）からは二艘で行われるようになり、東西二艘の舟やまが競うようになりました。

舟やまが出る川祭りは、津島神社の天王祭りが伝承されたものです。かつて

は木曽川流域の村々（犬山・宮田・笠松、無動寺）でも行われていたことから、舟運業に携わった船頭たちが伝えたのではないかとされています。

渡・北の集落で行われてきた川祭りは、水神さま・天王さまを公祀した神明神社で、連綿と続けられてきましたが、昭和三八年（一九六三）に途絶えてしまっています。高度経済成長による社会的な変化と、この地域に色濃く残されてきた船頭文化の衰退が途絶えた理由だと考えられています。

その後川祭りが復活したのは、三十七年後の平成一二年のこと。川祭りの愛好家によって組織された「かわしま川祭り運営委員会」が途絶えていた川祭りを復活させ、東海地方でも有数の交流拠点「河川環境楽園」で開催しました。

この伝統的な川祭りも、現在は、川島



川島の川祭り

地区の市民が総参加で繰り広げられる「かわしま燦々夏祭り」のメインイベントに。色鮮やかな提灯を飾りつけた巻簾船が川面に浮かび、お囃子を奏でながら川を上り下りする姿は、幻想的で大変趣があるものです。このイベントは、毎年七月下旬に開催されます。

笠松の川祭り



笠松の川祭り



毎年八月一日、岐阜県笠松町では全町をあげて盛大に川祭りが行われます。これは川島の川祭りと同じ流れを汲むもの。もともとは水天宮の例祭で、七月一五日、川沿いの上堤町、下堤町、柳原町で行われていました。明治になって、提灯の山船を出し、万燈流しと打ち上げ花火が行われるようになりました。大正五年（一

九一六には二枚腹三艘つなぎの屋形船のほか、一万個の万燈流しと打ち上げ花火が催されました。現在では木曽川港公園一帯で市民参加の夏祭りとして開催。夜空に大輪の花火が咲き、川面には万燈流しの灯りが幻想的な美しさを際立たせています。

犬山の巻き藁船祭り

犬山市の三光寺稲荷では、旧暦の六月二二日、三光寺祭りと呼ばれた川祭りが行われていました。これは五艘の巻き藁船が木曽川を下る祭りです。



犬山の巻き藁船祭り

昭和三十七年には姿を消しました。しかし、町内で復活の気運が高まり、平成一〇年に「内田巻き藁船保存会」の結成を経て三六〇個が飾り付けられます。

巻き藁船は二艘の船体を並べて二艘のやぐらを組んだもの。頂上に立つポールも含めれば高さは約一八m。提灯はやぐらの半円状に広がる二八〇個を含め三六〇個が飾り付けられます。

ツイン・ブリッジ(犬山橋)の下流の木曽川に、提灯を飾り付けた巻き藁船が行き来する様は、鵜飼の乗船客や夕

涼みに訪れた人達の目を楽しませる夏の風物詩として定着しています。巻き藁船は毎年八月上旬に二・三日運行されます。

宮田の川祭り

江南市の宮田では、旧暦の六月一六日の夜、川祭りが行われていました。舟三層をつなぎ、屋形には三百個を超える提灯を灯して、宮田用水の東杵あたりに浮かべるという祭りです。小さな木片にろうそくをつけて流したともいわれています。

宮田はもともと船頭が多く洪水被害もしばしば起きたので、こうして水神さまを祀ったようです。祭りのルーツは天正の時代に始まったともいわれ、ある年都合で祭りを取りやめたところ、村中が疫病で苦しんだとも伝えられています。川祭りで使った燃え残りのろうそくは村中に配られましたが、お産のときに腹痛が起きたらろうそくをつけ、燃え尽きると安産できるといいます。この川祭りは伊勢湾台風(昭和三四)年以来久しく中止されましたが、昭和四九年には地元祭りの保存会の手で復活し、一度だけ再現されました。現在は、水神さまの例祭りが毎年八月に行われています。

長良川まつり

毎年七月一六日、岐阜市の長良川に



長良川まつり

かかる長良橋北詰の神明神社で、水難防止と鮎供養を兼ねて盛大な祭事が行われています。

川祭りを迎える当日、各家の軒先には待つに短冊や小行灯をつけて飾り、玄関先には日の丸提灯を掲げました。また長良川には、飾り立てた舟が何艘も飾られました。古くから続いているこの川祭りは、川で生業を立てている人々の願いが込められていますが、主な願いは次のようでした。

- 一、材木をはじめ、物資の運搬に携わる船舶の安全を祈る。
- 二、川で遊ぶ人々の安全を祈る。
- 三、風水害を受けないように祈る。
- 四、鮎供養

この祭りがすむと、付近の子どもたちは、水泳をしてもよいとされてきました。

揖斐川町の川祭り



揖斐川町の川祭り

三重塔、鳥居などをかたどった提灯船が長良川を行き交う様は、まさに壮観美麗。夏の風物詩として親しまれています。近年は提灯やぐらをはじめ、各種の行事も盛大に行われています。

昭和二〇年(一九四五)頃に揖斐川筋の堤防が決壊し、住民や土地・家屋に被害が出たため、水を治めるといこととで前島地区に治水神社を建立し、水神さまを祀りました。その祭礼がこの川祭り。毎年、八月八日に催されます。当日は金魚すくいなどの屋台が出たり、盆踊りや花火大会が行われるなど、夏の一夜を楽しんでもらえるような趣向がこらされています。

参考文献

- 『ふな里の川祭り』 平成四年 川島地区川まつり保存会
- 『岐阜市史』 昭和五二年 岐阜市
- 『通史編民俗』 昭和五二年 岐阜市
- 『木曽川は語る』 平成一六年 木曽川文化研究会
- 『犬山の歴史散歩』 横山住雄著 平成元年
- 『江南市史』 資料四文化編 昭和五八年
- 『木曽・長良河川ガイドブック』 昭和六二年 木曽川下流河川事務所



長良川河道の

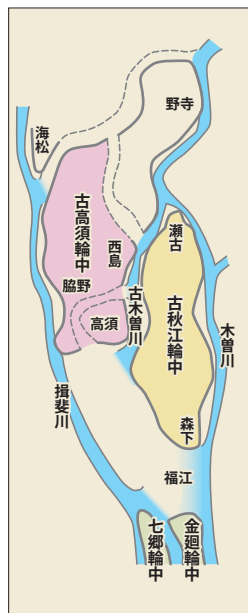
変遷と河川利用

国土交通省中部地方整備局 木曽川下流河川事務所 事務局長 関沢 元治氏

平成一七年（二〇〇五）八月二十八日から、海津市福江地先の長良川において2005FISA世界ボート選手権大会が開催される。この機会に会場となる福江地先の長良川河道の変遷と河道の利用について述べてみたい。

会場の福江地先の長良川は江戸時代において

は木曽川であった。この福江の地域は、古秋江輪中と天正四



創始期高須輪中想定図
(伊藤 信原図をもとに作図)

とされる金廻輪中の中にあつて古木曾川の河筋であり、木曽川の一派川（現在の長良川）が合流している地点であつた。濃尾平野を網目のように乱流していた木曽三川の氾濫域において、人々は比較的安定している中州に生活の拠点をもとめ、やがては集落単位で、洪水から集落をまもるための堤防を作り始め、ついには住居地と耕地の周りに堤防を築立てて「輪中」ができあがつた。

この当時の人々にとって河川は、信仰や生活への恵み、また時には洪水などへの憎悪と脅威の対象として存在するが、いずれも「水」「流水」が対象であつて、河川を形成するもう一つの要素の「河道」に対しては、新田開発の余地として見る以外には全く価値のない荒蕪地であつた。

堤防によつて防御された地域の土地利用の高度化が進み、社会資本の蓄積と人口の集中化が進むと、治水の安全度を高めるための河川改修と、レクリエーションなどの場としての河川敷の利用の要望が高まってきた。

この傾向は、長良川においても例外ではない、しかし、木曽三川のうち木曽川や揖斐川が上流ダムによつて、洪水量が調節され治水安全度が上昇していることに対して、長良川のみが明治改修によつて創られたままの状態であつた。

抜本対策として昭和四十六年（一九七二）から開始された「河道しゅんせつ」は、平成七年（一九九五）の長良川河口堰完成によつて、全区間にわたるしゅんせつが可能となり、平成九年（一九九七）にこれが完成して現在の河道が出来あがつた。

河道変更と輪中の形成

古代の木曽川は、現在の海津市高須輪中の中央を貫流している大江川筋にあつて、古高須輪中と古秋江輪中との間を

流れていた。

輪中の形成時期については「百輪中旧記」に『元応元己未年高須輪中塩除堤出来』とあり、さらに『建武二亥六月迄塩除堤出来瀬古成戸秋江』とあるから古高須輪中の潮除堤が完成するのが一九一三年（元応元己未、古秋江輪中では一三三五年（建武二亥）である。また、高須の稲荷神社は奈良時代の創建とする説があることから、この二つの輪中は古代から徐々に形成されていたと言えよう。

当時は、この古木曾川が美濃と尾張の国境であり、また伊勢との国境であつた。即ち、古秋江輪中は尾張国であり、金廻輪中は伊勢国であつた。

また古秋江輪中の中に「海西」の名が残っているが、これは、足利六代將軍義教（二四二九—一四四二）の時に、佐屋川より東を海東郡、西を海西郡と呼んだことに始まる。

天正十三年（一五八五）東海地方一円に大地震が発生し、加路戸（木曽岬町）が陥没により廃村となるなど各地で大被害がもたらされた。



関沢元治氏

以上のように、福江地先の河道は、古代から木曽川の河道として存在し、明治改修によって、長良川の河道として利用されるようになった。

明治改修が終わり、暫くの年月は維持工事のみが続けられ、昭和十二年（一九三六）増補改修工事に着手した。大正改修と呼ばれた木曽川上流部の改修工事との整合性を図るため、計画流量を一部変更して河道整備が行われた。

戦後の改修と河川利用

昭和二〇年代（一九四五）後半に入ると、木曽三川とともに計画流量の検討が加えられ、新しい時代に相応しい河川づくりがはじまった。これらの計画は、昭和四〇年（一九六五）に改正された河川法に基づいて「工事実施基本計画」として整理され、現在に至っている。

昭和四〇年代（一九六五）に入ると、地域住民の間に、河川敷を利用する機運が起り始めていた。このため、河道整備事業が制度化され、昭和四六年（一九七二）には、木曽川下流部で初めての事業として、

木曽川の弥富町地先で高水敷整備



長良川15km付近のマウンド（しゅんせつ前の河床）



宝暦期高須輪中図（宝暦治水絵図をもとに作図）

害を受け、その翌年の天正四年（一五八六）六月二十四日に未曾有の大洪水が発生し、このために流路は大きく変遷し、鶴沼から墨俣へ流れていた河筋が、ほぼ現在の木曽川の流れとなった。

当時の為政者豊臣秀吉は、新たな河筋となった木曽川を美濃と尾張の国境に改めた。このため新しい木曽川の西側となった葉栗（各務原市の一部）・中島（羽島市の一部）・海西（海津市の一部）の地域が美濃国へ編入された。

天正の洪水は高須輪中では弘和二年（一二三二）にかさ上げた堤防を五尺（一・五メートル）も越えて氾濫する大災害であったが、この時に形成された新しい木曽川は、輪中の中央から輪中の東側へ移動したため、古高須輪中と古秋江輪中の統合が容易となった。

慶長二年（一五九七）古秋江輪中と伊勢国金廻輪中との間の古木曽川河道に福江輪中が誕生した。これによって、木曽川筋と大江川筋は輪中によって完全に分離されて、高須輪中が実現し古木曽川は消滅して、現在見られる大江川の原因が出来上がったのである。



明治改修計画図



明治24年の地形と明治改修計画堤防法線

このように福江地先の河筋は、古木曽川が東向きから南向きに直角に流れていた時代から、高須輪中の東側に沿って、北から南への直線的な流れとなる河道へと変貌するが、依然として木曽川の流れである。

また、この古木曽川河道の上に、新たな土地として誕生した福江輪中は、美濃国であるが、古中島が幕府領、福江が尾張藩領として幕末まで支配された。

明治改修の「三川分流」

明治に入って、木曽三川の抜本的な治水対策を熱望する地域の要望を受けて、政府は明治二〇年（一八七七）二月、オ

ランダ人技師ヨハネス・レーケに対して、木曽川改修計画の調査を命じ、明治二十年（一八八七）大規模な河川改修工事に着手した。近代的治水と言われる「明治改修」の着手である。

明治改修は、明治四五年（一九一二）に完成するが、骨幹となる木曽川・長良川・揖斐川の三川を分離する「三川分流」工事は、明治三三年（一九〇〇）には完成し、ここに現在見られる新しい木曽三川の河筋が誕生した。

新しい長良川は、成戸付近から高須輪中の東側の土地を開削し、日原から長島輪中までは従来の木曽川の河道をそのまま活用して木曽川と分離した。レーケは、福江地先の河道計画では、木曽川の河道をそのままの姿で残してくれた。すなわち、福江地先の木曽川河道は、そのまま新しい長良川河道となった。長島輪中から下流は、長島輪中の西側の土地を開削したり、また従来の揖斐川の河道を活用して、長良川の河道を作った。

この時の長良川の河道断面は、計画流量を毎秒一万五千立方尺（毎秒四、一七〇立方メートル）として作られている。長良川に河道を譲った木曽川や揖斐川では、その部分を輪中の土地を開削して新たな河道を得ているとは言うまでもないところである。

計画流量の推移

	明治改修時	昭和増補時	現計画
木曽川	7,340	9,700	12,500
長良川	4,170	4,500	7,500
揖斐川	4,170	4,200	4,700

単位は毎秒立方メートル
明治改修時の値は、毎秒立方尺をメートル法に換算

に着手した。

昭和四八年(一九七三)、長良川で新しい計画に基づく大改修工事が本格化した。従来の計画流量である毎秒四千五百立方メートルを三千立方メートル増加させて、計画流量を毎秒七千五百立方メートルとし、これを安全に流すための河道づくりである。

既に着手しているしゅんせつ工事に続いて、長良川河口堰関連工事としてブラケット造成工事を開始した。長良川右岸の海津市(当時は海津町と平田町)部分に、幅五〇メートルから七〇メートルの高水敷を造成する工事である。

昭和五一年(一九七六)九月二日、海津市の最下流端にある治水神社から約二〇キロメートル上流の安八町地内で、異常な長雨洪水に起因する破堤災害が発生し、治水安全度の向上が強く求められてきた。

その翌年、昭和五二年(一九七七)は、木曽三川連合水防演習が開催される年に当り、当番事務所である木曽川上流工事事務所によつて治水神社付近の部分的に完成しているブラケット工の上で実施されることとなった。これが海津市地先の長良川河道利用の始まりである。

また、この昭和五二年(一九七七)には、木曽三川を公園として利用する「国営木曽三川公園」計画調査が始まった。

広大な河川敷の利用が前提であることは言ってもよい。潮汐の干満による水流の変動や、自然状態の河川敷は人々のレク

レーションとしての利用を阻んできたが、昭和五六年(一九八一)の「カーニバルフェスティバル」の開催に見られるように、河川利用への動きは緩やかに進んでいた。

昭和五九年(一九八四)には、ブラケット造成工事が順調に進捗している中で、一〇月二八日、「木曽三川歩け歩け大会」を地



第1回 木曽三川歩け歩け大会

元海津町とともに開催した。完成した高水敷の上を海津市森下地先をスタート地点として、治水神社直上流地点をゴールする約四キロメートルを約千七百人の参加者全員がゴミ袋を片手に、河川清掃を兼ねて完歩した。

高水敷の整備が、人々の河道への立入りを容易にし、新たな河川利用が始まる第一歩であった。昭和六二年(一九八七)には、明治改修工事着工から百周年にあたることから、「近代治水百周年記念事業」が一年間にわたり実施され、国営木曽三川公園の中核である「中央水郷地区」も一〇月にオープンし、その周辺の長良川河道の利用が高度化してきた。

水面利用の始まり

一方、本格的な水面の利用は、昭和六

一年(一九八六)の「長良川国際トライアスロン大会」、さらには平成四年の「デ・レーケ記念全国選抜競漕大会」が、ともに治水神社前の愛知・岐阜・三重の三県の県境が接する水域で開催されたことに始まり、現在の世界ボート選手権大会につながっている。



第1回 長良川国際トライアスロン大会

これらの利用は、長良川河口堰を含む長良川の大改修工事による河道の整備によつて、河川敷利用の拠点の設営が可能となることと、利用しやすい流水環境への変化を期待して始められたものである。

長良川のしゅんせつは、先に述べたように「明治改修」によつて造られた河道は、毎秒三千立方メートル分の洪水流下断面積が不足しているため、この不足分をしゅんせつによつて河床を掘り広げ、洪水の通過断面積(河積)を拡大確保することになった。

また、しゅんせつ工事は、海水の遡上による塩害を発生させないように、福江地先下流の局部的に河床の高い地区(「マウンド」と呼ばれていた)の潮止効果を期待して、マウンドから下流のしゅんせつを先行するなど、長良川河口堰完成と併せて

進め、平成九年に工事を完成した。

一方、ブラケット工事は、高須輪中地域では平成三年度(一九九二)でもって完成しているから、このしゅんせつの完成によつて、長良川に現在の新しい河川環境の誕生を迎えた。この河道は完成後、すでに数回の洪水を経験しているが、いずれも計画通りの機能を発揮していることが確認されている。

また、河口堰の運用と相まって福江地先の水深は常時約五メートル。水面幅も約五百メートルとほぼ一定で、五〇メートル幅の高水敷とともに、国営木曽三川公園の中核地域として活用が増大しつつある。

高水敷などの河道の利用は、周辺の社会構造により左右されることは勿論であるが、現在では、従来の洪水対策としての河川から、高水敷を含めた河川空間をもつ河川としての河川の価値観が変化してきている。

高水敷の公園利用、ボートなどによる水面利用の需要増大は、河川改修の進捗が生み出した産物である。河道利用を目的として河川改修を進めてきたのではないが、結果的には、河道利用に大きく貢献していることが、この長良川で実証されている。

河川に対する認識が薄れてきていると言われている今日、世界ボート選手権大会の開催など河道利用を通じて、多くの人々が河川に親しみ、そして河川への関心を高めて頂けることを期待している。

民話の小箱

観音寺の和尚の祈禱 海津市平田町

昔、昔のお話です。

青く豊かに広がる濃尾平野の米どころ「平田」にも葦が生い茂る沼地の時代がありました。

木曾・長良・揖斐川の三大川が運んだ土砂は徐々に三角州を形成し、

その高所に人々が住むようになったのです。

延文五年（二二六〇）八月

この年は長雨が続き、川の水かさは増す一方、

村の人々は、黒雲が立ち込める空を見上げ、

雨がやむのをただただ祈っているばかりでした。

人々の祈りも天には届かなかつたのでしょうか。

稲妻が暗い夜を駆け抜けると、

ついに濁流は堤防を切り裂き、

田畑や集落に襲いかかったのです。

怒涛のような夜が明けると、あたり一面は泥の海に、

稲田は無残な姿をみせています。

昨年も一昨年もその前も洪水で収穫はぐくわずか、

絶望した百姓たちは村を捨てる決意をしたのです。

住み慣れた我が家を捨てる村人たちの心の内には、

無念さが渦巻いていたのでしょう。

手入れされることもなくなつた田も畑も、

見る見る間に、荒れ果てていきました。

そんな窮状を嘆き哀しんだのが、観音寺の住職、有恵です。

なんとか堤防を復旧しようとして

一心不乱に祈りを捧げました。

残った村人は、この姿に心を打たれ



堤防の修理工事に力を注ぎました。

堤防は見事に復旧し、

長雨にも耐えうる頑強なものになりました。

有恵の執念にも近い努力を高く評価した領主は、

燈明料として土地を寄進、

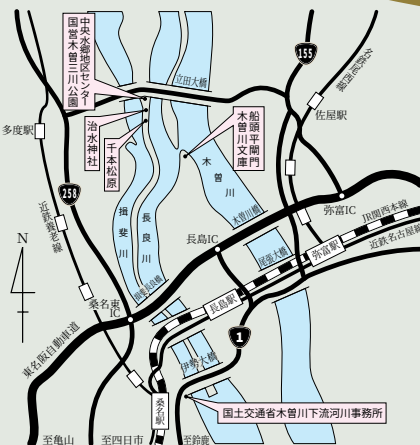
観音寺を神宮寺とする鳩森神社の禰宜、

氏貞も社領の一部を寄進しています。

こうして村には平穏な暮らしが戻り、

田も畑も実りの季節を迎えることができました。

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日（月曜日が祝祭日の時は翌日）・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、海津市平田町の皆様にご協力いただきありがとうございました。お礼申し上げます。

次回は、中津川市山口・馬籠地区(旧山口村)を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

●表紙写真● 上左：薩摩義士黒田唯右衛門の墓 上右：勝賀大池 下：揖斐川と今尾橋

『KISSO』Vol.55 平成17年7月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

木曾川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976